



TITLE:

マイケル・スミスのヒューム主義 とヒューム道德哲学の比較検討の 試み

AUTHOR(S):

奥田, 太郎

CITATION:

奥田, 太郎. マイケル・スミスのヒューム主義とヒューム道德哲学の比較検討の試み. 実践哲学研究 2004, 27: 1-28

ISSUE DATE:

2004

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/59245>

RIGHT:

マイケル・スミスのヒューム主義と ヒューム道徳哲学の比較検討の試み¹

奥田太郎

はじめに

現代の英語圏の倫理学、とりわけ、メタ倫理学と呼ばれる領域での研究をフォローしてゆくと、われわれは頻繁に「ヒューム」の名に出くわすことになる。その頻度とその名に与えられた権威たるや、「カント」と双璧をなすかと思われるほどに高い。現に、関連する研究書の巻末のインデックスを見た時、その中にその名が含まれていないことは稀である。それほどに影響力のある哲学者なのだ、とヒューム研究者としてはまんざらでもない気分にもさせられはするが、しかし、果たしてそれを楽観していてよいのだろうか。

実は、かつての素朴な「懐疑論者ヒューム」、「無神論者ヒューム」という哲学的なデフォルメを彷彿とさせる事態が、現代の倫理学においても生じているのではないのか。もちろん、哲学的議論が深化するための踏み台として、先行する哲学的主張を単純な図式へとデフォルメ化し、その上で別の角度からのアプローチを可能にすることは必要でありまた有益でもあろう。しかしこのことは他方で、デフォルメ化された図式が流通するにつれて、それがデフォルメにすぎないという重要な事実が忘却されてしまうという有害な側面も同時に併せ持っている。

このような心配をよそに、現代メタ倫理学の最先端の議論は今もどんどんと深

¹本稿は、2004年9月3日に関西大学で開催されたヒューム研究学会第15回例会における報告を加筆・修正したものである。

まっているのであろう。そしてまた、現代メタ倫理学の議論の深化にとっては、ヒューム自身の議論がどうなっているのかという問題は特に検討すべき問題ではないのかもしれない。しかし逆に、ヒューム研究を行なう場合には、現代メタ倫理学の議論に対してどのようなスタンスをとるのかは大きな問題である。メタ倫理学的ヒューム主義がヒューム自身の見解からずいぶんと外れたところに行ってしまうにせよ、ヒュームの名がついている以上、その議論をフォローアップし、ヒューム研究に反映させることも考慮に入れなければならない。

また、他方で、メタ倫理学の論争が、デフォルメ化された図式をスタート地点として、それに対する反論と対案提示という形で展開されていき、やがて、細かい揚げ足取りの相互批判を通じて袋小路に行き当たってしまう可能性がないわけではない。そのとき、その原因をスタート地点で削ぎ落としすぎた理論的な広がり求め、論争を仕切り直すことが必要となるかもしれない。そこで効力を発揮するのは、たとえば、デフォルメ化される以前のヒューム哲学であってもおかしくはないだろう。

このような認識に基づいて、本稿ではひとまず、メタ倫理学的ヒューム主義とヒュームの哲学の間にどれほどの裂目が生じているのかを確認しておきたい。論の運びは、(1) まずメタ倫理学的ヒューム主義の理論のひとつを詳細に眺め、(2) それらとヒュームの見解とを照らし合わせてみる、という順である。

1. マイケル・スミスのヒューム主義

「ヒューム的」と冠される理論や発想は、実に多様な形で現代倫理学の中に現れてくる。そのすべてに言及することは、現代倫理学の研究領域の大部分をカバーすることに他ならないため、過大にすぎる作業である。そこで、今回は、特定の論者による特定の論点にしばって現代倫理学におけるヒューム像を取り扱うことにしたい。その論点のひとつは、「動機づけのヒューム主義理論(Humean theory of motivation)」と呼ばれるものである。20 世紀後半以降のメタ倫理学の論争にお

いて、この論点は欠くことのできない軸となってきた。そして、その様子を見通しよくまとめた倫理学者として、マイケル・スミスの名を挙げることができる。また、多くの論者が自らの立場をヒューム主義か反ヒューム主義かのいずれかに置くのに対して、マイケル・スミスは、部分的にヒューム主義を完全に擁護し、部分的に反ヒューム主義を擁護するという少しねじれた立場をとっている。したがって、検討の相手としては少々手強い論者であるとみなすことができよう。そこで本稿では、このマイケル・スミスの描き出した「ヒューム主義理論」を主な検討の対象としたい。

1.1 マイケル・スミスのプロジェクト

まず、マイケル・スミスのプロジェクト全体を概観しておこう。スミスは、その主著(Smith [1994])の冒頭において、人間の心理に関する標準的な図式をヒュームに求めている。そこで提示されるのがメタ倫理学の領域ではもはやお馴染みとなった「信念／欲求」の心理モデルである。

人間の心理に関する標準的な図式- われわれはそれをヒュームに負っているのだが- によれば、主に 2 種類の心理的状态が存在する。一方にあるのは信念(beliefs)である。これは、世界のあり方を表すと称する状態である。われわれの信念は、世界を表すと称するので、それが世界を現実の通りにうまく表しているか否かに応じて、真偽について評価される。他方にあるのは欲求(desires)である。これは、世界がいかにあるべきかを表す状態である。欲求は、世界のあり方を表すと称しさえしないという点で、信念とは異なる。欲求は、それゆえ、真偽について評価されえない。ヒュームは、信念と欲求はしたがって別々の存在である、と結論する。…実際、ヒュームに由来するこうした人間の心理の標準的な図式にしたがえば、欲求は、真偽について評価されえないのみならず、い

かなる種類の合理的批判(rational criticism)にさらされることもない(Smith [1994], pp. 7-8)。

スミスは、この「ヒュームの心理モデル」を起点として、論者によって見解の相違が著しい現代のメタ倫理学の中心問題を「道德問題(the moral problem)」と呼び、錯綜したこの問題を 3 つのテーゼの整合性の問題として整理し、彼独自の解決方法を提示している²。その 3 つのテーゼとは次のようなものである。

1. 「私が ϕ するのは正しい」という形式の道德判断は、その人が何をするのが正しいのかに関する客観的な事実についてのある主体の信念を表明している。
2. もし誰かが、自分が ϕ するのは正しいと判断したならば、ほかの条件が等しければその人は ϕ するよう動機づけられる。
3. ある行為者がある仕方で行為するよう動機づけられるのは、まさに、その人が適切な欲求(appropriate desire)と目的-手段信念(means-end belief)をもっている場合である。そこでは、信念と欲求は、ヒュームの言葉通り、別々の存在である(Smith [1994], p. 12)。

それぞれ、(1)道德判断の客観性、(2)道德判断の実践性、(3)ヒューム主義に関するテーゼである。(1)により、道德判断によって表明されるのは信念であり、(2)により、その信念は何らかの仕方動機づけと必然的に結びついていることになる。動機づけとは、(3)により、欲求をもつことである。このようにして(1)(2)(3)が合わさると、道德に関して信念と欲求の間に何らかの必然的な結びつきがある

²スミスの議論については、田村 [2004]、62-5 頁においてもう少し広い文脈から簡潔にまとめられているので、参照せよ。

ことになるが、(3)によれば、そのような結びつきは存在しない。信念と欲求は別々の存在だからである(Smith [1994], p. 12)。

スミスによれば、現代のメタ倫理学の様々な立場は、これら 3 つのテーゼの不整合を解決するためにいずれか 1 つのテーゼを捨てることによって成立している。たとえば、表出主義者(expressivist)は(1)を退ける³し、外在主義者(externalist)は(2)を退ける⁴。両者は(3)を維持しているという点で「ヒューム主義」に属すると考えられる。それに対して、反ヒューム主義者(anti-Humean theorists)は(3)を退ける⁵。スミスの狙いは、これらの両立しえないかに見える 3 テーゼをすべて整合的につなげてみせて「道德問題」の根本的な解決を図るという野心的なものである。問題解決のためのスミスの基本的な戦略は、倫理学が扱う「行為の理由」を「動機づける理由(motivating reasons)」と「規範的な理由(normative reasons)」の 2 種類に分け、前者についてはヒューム主義をとるが、後者については反ヒューム主義をとる、というものである(Smith [1994], pp. 13-4)。

以上がスミス自身のプロジェクトであるが、本稿では彼のプロジェクト全体の検討が主たる目的ではないため、以下、ヒュームの理論との突き合わせという本稿での目的に沿う部分に注目して彼の議論を整理していくことにする。

1.2 「動機づける理由」をめぐるヒューム主義

すでに述べたように、スミスは、行為の理由を「動機づける理由」と「規範的な理由」の 2 種類に分けた上で、前者については、行為を説明するヒュームの「信念／欲求」モデル、すなわち「動機づけのヒューム主義理論」を受け入れ、後者については、「欲求はそれ自体として合理的な批判(rational criticism)を免れてい

³スミスは、エア、ヘア、ブラックバーン、ギバードの名を挙げている。

⁴スミスは、フランケナ、フット、スキャンロン、レイルトン、ブリンクの名を挙げている。

⁵スミスは、ネイゲル、マクダウェル、プラッツ、マクノートン、ダンシーの名を挙げている。

る」というヒュームの主張を退けて反ヒューム主義をとる(Smith [1994], p. 14)。スミスの議論に立ち入る前に、彼が「動機づける理由」と「規範的な理由」をどのような形で分けているのかを簡単に確認しておこう。

スミスがここで「理由」と称しているものは、「それを挙げることによってわれわれがある行為者の行為を理解できるようになるようなもの」(Smith [1994], p. 95)のことである。たとえば、誰かが何かをしているのを見たとき、われわれがその様子を理解するためには「理由」に言及することが不可欠だということである。「動機づける理由」と「規範的な理由」はともにこうした「理由」であるが、そこには大きな違いがある。

スミスによれば、「ある人には ϕ する規範的な理由がある」と言うことは、「その人が ϕ するということの何らかの規範的要請がある」と言うことであり、もう少し詳しく言えば、「その人が ϕ することは、そうした要請を生み出す規範システムの観点から正当化されている」と言うことである。したがって、「規範的な理由」とは、「A が ϕ することは望ましい(desirable)、あるいは求められている(required)」という一般的形式をとる命題、または真実(truths)だと考えられる(Smith [1994], p. 95)。これに対して、「動機づける理由」は、行為の発生を説明するのに役立つ心理的状态(psychological states)である(Smith [1994], p. 96)。言うなれば、両者はともに行為の理解のために用いられる「理由」ではあるが、「規範的な理由」は正当化の理由であり、「動機づける理由」は、記述的説明のための理由だと考えられる。

2種類の「理由」について以上のように理解した上で、まずは、「動機づける理由」に関するスミスの議論を見てみよう。スミスは、ヒューム主義理論は、動機づける理由の性質に関しては正しいことを言い当てている、と考え、様々な批判に応えながらヒューム主義の擁護を試みている。ここからは、少し煩瑣な記述になるところもあるが、スミス自身の問題の捉え方を理解するために、スミスのテキストに即した形で議論を整理していく。

スミスによれば、「動機づけのヒューム主義理論」はより強い原理とより弱い原

理とから成る。これらは、それぞれ P1⁶、P2 として、以下のように定式化される。

P1 時点 t での R が、行為者 A が ϕ するための動機づける理由を構成するのは、時点 t での R が、A の ψ したいという適切に関係づけられた欲求と、仮に A が ϕ するなら A は ψ するだろうという信念とから構成されているような、そのような何らかの ψ が存在する場合であり、かつ、その場合に限られる。(R at t constitutes a motivating reason of agent A to ϕ if there is some ψ such that R at t consists of an appropriately related desire of A to ψ and a belief that were she to ϕ she would ψ .) (Smith [1994], p. 92)⁷

P2 時点 t での行為者 A が ϕ するための動機づける理由をもつのは、時点 t において A が ψ したいと欲求し、仮に自分が ϕ するなら ψ するだろうと信じているような、そのような何らかの ψ が存在する場合に限られる。(Agent A at t has a motivating reason to ϕ only if there is some ψ such that, at t, A desires to ψ and believes that were she to ϕ she would ψ .) (Smith [1994], p. 93)⁸

スミスの整理するところでは、反ヒューム主義者の中には、P2 をも退けるプラ

⁶この定式化はそもそもはデイヴィドソンによるものである。

⁷ ϕ を「約束を守る」、 ψ を「信頼を得る」と考えると、P1 で言われていることは、次のように表現することができるだろう。

R at t : 「私が約束を守るための動機づける理由」 = R at t (信頼を得たいという私の欲求+私が約束を守れば私は信頼を得るだろうという信念)

⁸同じく、 ϕ を「約束を守る」、 ψ を「信頼を得る」と考えると、P2 で言われていることは、次のように表現することができるだろう。

私が今、約束を守るための動機づける理由をもつためには、今、私が信頼を得たいと欲求し、私が約束を守れば私は信頼を得るだろうと信じていることが必要である。

ツツのような強硬な論者もいるが、ネイゲルとマクダウェルのように、P1 を退けても P2 は許容可能であると考える者もいる。スミスは、P2 のみならず P1 をも擁護しようと試みている。しかし、ここではそうした擁護の作業の詳細にはなるべく立ち入らず、必要な論点のみをピックアップしておきたい。

論点 1：理由説明の構想

最初にとりあげるのは、ヒューム主義による理由説明の構想を「疑似水圧構想 (quasi-hydraulic conception)」と名付けるマクダウェルの批判(McDowell [1998], p. 213)とそれに対するスミスの応答である。ヒューム主義の理由説明は、心を「様々な力や圧力(すなわち欲求)が水路を通じて(信念を通じて)一定の方向に流れ、最終的に混ざり合って合成的な力や圧力(行為)を生み出す場」(Smith [1994], pp. 101-2)であると考えているが、これは理由説明に関する根本的な誤解である、とマクダウェルは批判する。この批判についてスミスはほぼ全面的に受け入れている。スミスは、一昔前ならヒューム主義者に対してこの批判が当てはまっただろうが、今は違う、と応える。スミスによれば、ヒューム主義者は、理由説明の疑似水圧構想どころか、デイヴィドソンが展開したような理由説明の因果理論にすらコミットしていない。現代メタ倫理学のヒューム主義者と反ヒューム主義者が取り組んでいるのは、「理由説明が目的論的説明(teleological explanations)でありうるようにする理由の性質とはいったい何か」をめぐる論争に他ならない(Smith [1994], p. 104)。つまり、ヒューム主義の問題は、行為の記述的説明を因果的に行なえるか否かではなく、むしろそれを目的論的に行なうためには「動機づける理由」にどのような内実が必要か、を問うことなのである。したがって、マクダウェルの批判はヒューム主義に対する根本的な批判ではありえない、というわけである。

論点 2：欲求論

さて、スミスは、この路線上でヒューム主義を擁護するべく、「欲求」を詳細に分析することになる。スミスは、ストラウドの解釈に依拠しつつヒュームの欲求論について、次のように述べている。

ヒュームによれば、欲求は情念の一種であり、情念はある種の感じ(feeling)である。ヒュームは、このことを、単に、情念が知覚の一種であり知覚が一種の感じであるというトリヴィアルな意味でのみ考えているわけではないようである。むしろ、彼は、われわれが何かを欲求するとき「われわれは好悪(aversion or propensity)の情動を感じる」、ということを示唆している。したがって彼の見解は、われわれは欲求の存在に「直接的に気づいて」いる、すなわち、欲求はそれ自体、現象として突出している(phenomenologically salient)、ということである (Smith [1994], pp. 104-5)。

スミスはこの後、「私が怒っているとき、私はその情念に取り付かれている」というヒュームのフレーズを引き、ここから「欲求の強い現象論的理解(the strong conception of desires)」が導き出されると考える。「欲求の強い現象論的理解」とは、欲求は感覚(sensations)と同じく一定の現象的内容(phenomenological content)をもつ状態に他ならない、とする見解である。たとえば、痛みの感覚は、われわれがその存在に気づく現象的内容をもっている。これと同様に、欲求もまた、われわれがその存在に気づく現象的内容をもっている、と考えるわけである。しかし、スミスによれば、こうした「欲求の強い現象論的理解」は、まともな「欲求の認識論(epistemology of desire)」に結びつかないので、却下されるべきものである。つまり、「欲求の強い現象論的理解」に基づく「欲求の認識論」は、「感覚の認識論」とまったく同じになってしまう。スミスによれば、「欲求の強い現象論的理解」に

基づけば、痛みを感じることはその痛みの現象的内容に直接的に気づいている(そのような現象的内容を伴う状態にいと信じている)ことに他ならない、という「感覚の認識論」と同じように、「欲求の認識論」は、 ϕ したいと欲求することはその欲求の現象的内容に直接的に気づいている(そのような現象的内容を伴う状態にいと信じている)ということに他ならない、というものになるが、これは次の2つの点で誤りである。

第一に、欲求に関して適切な理解をするためには、それは、われわれは自分の欲求に関して思い違いをしがちであるということを許容するような「欲求の認識論」が支持される理解でなければならない。たとえば、息子を音楽家にさせたいと強く願う母親をもつある男が、「自分は母親を喜ばせたいと思うのとは無関係に、純粋に偉大な音楽家になりたいという欲求をもっているからそのための努力をしている」と言っていたが、その母親が死去するや否や音楽への関心を失ってしまった、というような事例の場合、その男は自分の欲求に関して思い違いをしていた、と考えるのが普通である。この事例では、その男は自分では純粋に音楽家になりたいと欲求していると信じていた(そのような現象的内容を伴う状態にいと信じていた)が、実際にはそのような欲求をもっていなかった(むしろ母親を喜ばせたいという欲求をもっていた)のである。「欲求の強い現象論的理解」に基づく「欲求の認識論」は、こうした思い違いの事例を捉えることができない(Smith [1994], pp. 106-7)。

第二に、欲求は、命題内容(propositional content)をもつという点で、感覚とは異なる。ある欲求が主体 A に帰属させられるときには、「A は p を欲求する」という形式をとり、そこでの p は文である。これに対して、ある痛みが主体 A に帰属させられるときには、「A は p を痛む」という形式をとらない。スミスによれば、「欲求の強い現象論的理解」に基づく「欲求の認識論」は、やはり、命題内容をもつという欲求の本質的特徴を捉えることができない。言い換えると、欲求は、命題

内容をもつため、感じられなくてももたれることが可能である⁹。この点において、欲求は感覚と決定的に異なる。しかし、(感覚をもつことと感覚を感じることを結びつけるのと同じく)欲求をもつことと欲求を感じることを結びつける「欲求の強い現象論的理解」では、このことを捉えることができない。したがって、スミスは、欲求が命題内容をもつことを捉えるために、現象論的でない欲求理解が必要である、と結論する(Smith [1994], pp. 107-11)。

そこでスミスは、アンスコム「心の状態と世界との適合の方向性(the direction of fit of mental states with the world)」というアイディアに依拠して、より適切な「欲求の認識論」を可能にする欲求理解を提示しようと試みる。平たく言えば、信念と欲求では「心と世界との適合の方向性」が異なっていて、信念の場合は心が世界に適合し、欲求の場合は世界が心に適合する、ということである。さらにスミスは、このアイディアを活かすために、「欲求の認識論」に関する有益な示唆をヒュームの「穏やかな情念」の議論から得ようとする。

ヒュームは、それをもつ主体に影響を与える「激しい情念(violent passions)」と平行して、「穏やかな情念(calm passions)」が存在することを十分すぎるほどにわかっていた。「穏やかな情念」は、現象的内容を完全に欠いた情念である。したがって、彼は、欲求はその現象(phenomenology)によって知られる、という欲求の認識論に関する自らの公式見解が、穏やかな情念の認識論としてまったく不適切であるという事実を知っていたし、また、それゆえに、穏やかな情念に適した認識論を別口で用意する必要があるという事実も知っていた。結果的にヒュームは、激しい情念とは対比的に、穏やかな情念は「直接の感覚よりもその結果によってよりよく知られる」、と示唆することになった(Smith [1994], pp. 112-3)。

⁹音楽家になりたい男の例を想起せよ。かの男は、自分で感じていなかった欲求を実際にはもって

ただし、「直接の感覚よりもその結果によってよりよく知られる」というヒュームのフレーズは、先ほど論点 1 で退けた(欲求を行為の原因として捉える)因果説への言及であるため、スミスがコミットする現代的ヒューム主義の立場ではこれを直接参考にするわけにはいかない。そこでスミスは、このヒュームのフレーズから示唆される欲求理解を傾向性(disposition)という切り口で考える。すなわち、欲求は、一定の機能的役割をもつ状態にあること、つまり、一群の傾向性をもつことだと考えるのである。スミスによれば、穏やかな情念の知られ方に関するヒュームの示唆は、欲求の認識論は傾向的状态(dispositional states)の認識論(反事実的条件文の認識論)に他ならない、という考えに翻訳されうる。こうして、欲求は、一定の条件下で一定の仕方で行う傾向性だと考えられることになる。そして、傾向性としての欲求は、「もしある主体が条件 C に置かれたならば、その主体は ϕ するだろう」という反事実的条件文の形で表すことができることから、欲求のもつ命題内容についてもきちんと説明することができるのである。

欲求を複雑な傾向的状态と考えれば、欲求は、信念の要素を必要とすることになる。たとえば、ある主体が ϕ する条件を満たすには、その主体が目的-手段信念をもつ必要がある、といった形でである。すると、欲求と信念の違いが見えにくくなるのではないかと思われるかもしれないが、先に言及したアンスコム由来の「適合の方向性」のアイディアと結びつけて考えることで、それは杞憂に終わる。適合の方向性に関する信念と欲求の違いは、信念と欲求の機能的役割の違い、つまり、 p という信念と p という欲求との、 p でないという内容をもつ知覚に対する反事実的な依存の仕方の違いに他ならない、と考えられる。もう少し展開して言うと、 p という信念は、 p でないという内容をもつ知覚が現れると消滅するが、 p という欲求は、それでもなお存続し、そうした状態にある主体に p ということを実現させるよう傾向づける。傾向性として理解された欲求は、このような形で、

いたと考えられる。

「世界を適合させる状態」として理解することができるのである(Smith [1994], p. 115)。

さて、論点 1 において指摘したように、ヒューム主義と反ヒューム主義の問題は、行為の記述的説明を目的論的に行うためには動機づける理由にどのような内実が必要か、である。「動機づける理由」についてヒューム主義を擁護するスミスは、この問いに対して、「動機づける理由」の内実として相応しいのは、P1 や P2 として表される「動機づけのヒューム主義理論」である、と結論する必要がある。ここまでの議論を踏まえた上で結論に至るまでの議論を骨組みだけ述べると、以下ようになる。「動機づける理由」は、行為を理解可能なものとして説明するのに役立つ。その際、説明は因果的にではなく目的論的に行われる。すると、ある行為者が動機づける理由をもつことは、その行為者が何らかの目的をもつことである、と考えられる。そして、何らかの目的をもつことの「適合の方向性」は、世界を心に適合させる方向にある。したがって、同じように「世界を適合させる状態」である欲求(しかも、傾向性として理解された欲求は、信念の要素を必要とする)こそが、行為の目的論的説明に相応しい、ということになる。このようにして、スミスは、「動機づける理由」のレベルでは「動機づけのヒューム主義理論」(P1、P2)は正しい、と論じるのである¹⁰。

1.3 「規範的な理由」をめぐる反ヒューム主義

前節冒頭でも述べた通り、スミスは、「動機づける理由」についてはヒューム主義を支持するが、「規範的な理由」については反ヒューム主義をとっている。まずは、スミス自身による「規範的な理由のヒューム主義理論」の記述を見ておこう。

¹⁰ 「動機づける理由」に関するスミスの議論については、Miller [2003]において簡潔に紹介されている。また、スミスの議論に対してメタ倫理学の視点からの批判が提出されている(Miller [2003], pp. 278-9)。

もちろん、ヒューム自身の見解は、われわれの信念は真偽について評価されうるし、そうやって、合理的か不合理か判断されうるが、他方、われわれの欲求は、真偽についてまったく評価されえないし、少なくとも偽なる信念に基づいていないのなら、合理的批判を完全に超越している、というものである。それゆえ、規範的な理由のヒューム主義の見解は、ある行為者が合理的に行為することは、その内容にかかわらず自らの欲求を最大限満たすように行為することである、というものである。したがって、ある行為者のどのような行為が合理的かは、その行為者が最もやりたいのはどのような行為かに対して相対的である¹¹(Smith [1994], p.130)。

スミスは、こうした「規範的な理由のヒューム主義理論」を退け、「規範的な理由の反ヒューム主義理論」を提示する。その際に確認されるのが、「評価すること (valuing)」と「欲求すること (desiring)」の相違である。スミスは、われわれが心理的な圧迫、身体的中毒状態、情動的な障害に直面した場合を例として提示し、われわれが時として、評価していることを欲求しないことや、評価していないことを欲求してしまうことを明らかにする(Smith [1994], pp. 133-6)。これによって、「評価すること」と「欲求すること」とは区別して考えられるべきものだということになる。

「規範的な理由」が、先に述べたように、「A が ϕ することは望ましい、あるいは求められている」という一般的形式をとる命題、すなわち、説明に用いられる正当化理由であるなら、「 ϕ する規範的な理由をもつこと (having a normative reason)」は「 ϕ するのを評価すること」に他ならないと考えられる。すると問題は、ヒュームの心理モデルに基づいて、「評価すること」が「信念をもつこと

¹¹スミスは、こうした「規範的な理由のヒューム主義理論」を(ゴータイエに倣って)「合理性に関する「最大化」理解('maximizing' conception of rationality)」と呼ぶ。

(believing)」の問題なのか、「欲求すること」の問題なのか、ということになる。いずれを支持するにせよ、われわれは難問に直面してしまう。

仮に「評価すること」＝「信念をもつこと」という反ヒューム主義を支持した場合には、規範的な理由に関する信念とみなされたわれわれの価値観(評価)は、容易にわれわれの欲求とは切り離して考えることができるようになる。しかしその反面、「動機づけのヒューム主義理論」を認めたままでは、形成された評価的信念が、欲求とどのようにして結びつくのか(われわれの行為をどのようにして変化させることができるのか)という実践性の問題に直面することになる¹²。他方、「評価すること」＝「欲求すること」というヒューム主義を支持した場合には、評価していることを欲求できないことがありうるのはいかにしてかを説明しなくてはならない、という困難に陥ることになる。

スミスは、この二者択一の中で、予告通り、「評価すること」＝「信念をもつこと」という反ヒューム主義を支持する。そして、自説を補強すべく、ヒューム主義の立場を 3 つのパターンに分け、それぞれ批判を加えていくのである。その 3 つのパターンとその批判は以下の通りである。

1. デイヴィッドソン型 [「評価すること」＝「欲求すること」]: 逸脱例を考慮に入れていない。目的そのものの合理性について問えない (Smith [1994], pp. 138-41)。
2. ゴーティエ型 [「評価すること」＝「欲求すること」の一形態]: 欲求することなく評価する可能性を無視している (Smith [1994], pp. 141-2)。

¹²もちろん、「動機づける理由」のレベルでヒューム主義を捨ててしまえば、この「実践性の問題」は、スミスとはまったく別のアプローチで解決可能であるかもしれない。実際、ダンシーは、自ら「純粹認知主義(pure cognitivism)」という立場を掲げて、より徹底した反ヒューム主義の論陣を張っている (Dancy [2000])。このダンシーの見解に対してスミスがさらに批判を加えている (Smith [2004], pp.146-53)。

3. ルイスとフランクファート型 [「評価すること」＝「欲求することを欲求すること」(高階の欲求)] : レベルの選択が恣意的である。高階であっても欲求は欲求にすぎない(Smith [1994], pp. 142-7)。

では、スミスは反ヒューム主義の直面する難問をどのようにしてクリアしようとするのだろうか。反ヒューム主義が直面する難問は、「評価すること」＝「評価に値するという信念をもつこと(believing valuable)」と「欲求すること」との間の概念的結びつきにかかわっている。スミスは、この概念的結びつきを次のように定式化している。

C2 もしある行為者が自分には ϕ する規範的な理由があると信じているのならば、合理的に、その行為者は ϕ したいと欲求すべきである。(If an agent believes that she has a normative reason to ϕ , then she rationally should desire to ϕ .) (Smith [1994], p. 148)

この C2 がいかにして可能か、というのがスミスの反ヒューム主義の課題である。スミスは、「通常の思考」と「決まり文句」を試金石としながら規範的な理由に関して分析し(Smith [1994], pp. 151-77)、それに基づいて、「われわれには ϕ する規範的な理由がある」という信念は、「もしわれわれが完全に合理的であれば、 ϕ したいと欲求するだろう」という信念として表すことができる、と考える。そこで、われわれは「自分たちが完全に合理的であれば ϕ したいと欲求するだろう」という信念をもちながら、 ϕ したいと欲求できなかった、と想定する。この場合、われわれは不合理であると考えられる。なぜなら、われわれは、それをもつことが合理的だと自分で信じていた欲求をもつことができなかったからである。これは、言い換えると、もしわれわれが完全に合理的であれば ϕ したいと欲求するだろうと信じているのならば、合理的に、われわれは ϕ したいと欲求すべきである、ということになる。これはまさに C2 に他ならない(Smith [1994], p. 177)。

スミスはさらに、「もしわれわれが完全に合理的であれば ϕ したいと欲求するだろう」という信念をもちながら、 ϕ したいと欲求できなかった場合に、われわれが、自分の評価的信念を変えるのではなく、 ϕ したくないという欲求を取り除き、 ϕ したいという欲求を得る(欲求を変える)のはなぜか、を示そうと試みる。

もしわれわれが完全に合理的であれば ϕ したいと欲求するだろうという場合にのみ、 ϕ することは望ましい(ϕ する規範的な理由がある)。われわれが信じているのは、もしわれわれが完全に合理的であれば ϕ したいと欲求するだろう、ということ(信念 A)である、と仮定する。このとき、われわれは、もし自分が完全に合理的であれば ϕ したくないと欲求するだろう、とは信じていない。ここで、われわれが実際に ϕ したくないと欲求している、という単なる事実は、われわれに信念 A を変える(信念 A の真理値を再評価する)理由を与えない。こうして、われわれは、合理的には、 ϕ したくないという欲求を取り除き、 ϕ したいという欲求を得るべきである、ということになる(Smith [1994], pp. 177-8)。スミスは、人間が一定程度の合理性を備えているという経験的事実に基づいて、われわれが規範的な理由に関する信念をもったときには、心理的な整合性を求める圧力が働いて、欲求の変化を促す、と考えているのである。

2. ヒューム道徳哲学との比較検討

ヒュームの哲学の中で、現代倫理学の「ヒューム的心理モデル」に直接対応する部分は、『人間本性論』の第2巻、主にその第3部、および、第3巻第1部である。この節では、前節での議論に関係する箇所をピックアップして、マイケル・スミスのヒューム主義の見解とヒューム自身の見解との差異を明確にしておきたい。議論の便宜上、スミスによる「動機づける理由」と「規範的な理由」の区別に従い、それらを順に検討していくことにする。

2.1 「動機づける理由」をめぐるヒューム主義との対照

実は、今回取り扱った議論の中でスミスがヒュームのテキストを引用、参照しているのは、主要なところでは「動機づける理由」のヒューム主義を論じた章の中の 3 箇所のみである。最初にテキストに対して言及されるのが、ヒュームの欲求論から「欲求の強い現象論的理解」が導かれることを指摘する箇所である。スミスは、「われわれが何かを欲求するとき「われわれは好悪の情動を感じる」」(Smith [1994], p. 105)というように、引用を交えてこれをヒュームの言明として提示している。これに対応するヒュームのテキストは、T2.3.3.3 に見られる。

われわれは、何らかの対象から苦痛や快樂がもたらされるのを予想すると、結果として生じる好悪の情動を感じ、そうした落ち着いたさや満足をわれわれにもたらしものを避けたり受け入れたりするよう動かされる、ということは明らかである(Hume [2000], p. 266)。

この部分の「結果として生じる好悪の情動」について、編者のノートンは、「苦痛なものを避けようとする欲求や、快いものを得ようとする欲求」(Hume [2000], p. 525)と注釈を加えている。スミスはこの箇所から、ヒュームが「欲求をもつこと」と「欲求を感じること」とを同一視する欲求理解の誤りを犯している、と読み取っている。しかし、文脈に即して考えると、この箇所では、理性が行為に影響を及ぼすことはできないことを示す議論の中で、理性の働きのひとつである因果的推論と行為のかかわりについても情念が重要な役割を果たす、ということが述べられているだけである。もちろん、「好悪の情動を感じる」という表現からスミスの解釈を引き出すことも不可能ではないだろうが、この箇所をもって文献的証拠とするには少々乱暴で不適切である。

スミスが「欲求の現象論的理解」を導くために言及しているヒュームのテキストは、もう一箇所あり、それは、T2.3.3.5 に見られる。それは、ヒューム研究者の

間でも議論の尽きない、いわば「問題のテキスト」である。

情念は原初的な存在である。あるいは、存在の変容であると言ってもよい。情念は、何らかの他の存在や変容の写しになるのに必要な再現的性質をまったく持っていない。私が怒っているとき、私は実際にその情念に取り付かれているのである。情動が他の対象をまったく参照しないのは、私が喉が渇いたと思ったり気分が悪かったり、身長 5 フィート以上であったりするときと同じである。したがって、こうした情念が、真理や理性と対立したり矛盾したりすることはありえない。なぜなら、矛盾は、写しとしての観念と、それが再現している当の対象とが不一致であることに存するからである(Hume [2000], pp. 266-7)。

ここでは、ヒュームの哲学の基本的な道具立てである印象と観念という知覚の区分に基づいて、情念が単純印象であるということが別の角度から説明されている。文脈に即して解釈すれば、「私が怒っているとき、私は実際にその情念に取り付かれている」というフレーズは、怒りの情念にはそれが写し取ってくる元になるもの(いわば原情念とでも言うべき対象)はないのであり、私が現に抱いている怒りの情念はそれ自体がオリジナルである、という情念の存在論を言い表していると考え他はない。しかも、ヒュームがここで取り扱っているのは情念一般に関する事柄であって、欲求という数ある情念の一種にのみ関する事柄ではない。さらに言えば、この引用箇所からは、情念の性質に関する見解がそのまま、スミスの退ける「規範的理由に関するヒューム主義」に相当する主張へと直結しているのがわかる。このように考えると、スミスが当該箇所を文献的証拠とするのはやはり適切だとは言えないだろう。

とはいえ、文献的証拠としては不適切な引用であっても、スミスの議論の中身は当を得ているかもしれない。たとえば、ヒュームによれば、情念が単純印象で

あるがゆえに、我々は、多くの言葉を費やしても情念の正しい定義を与えることができず、できるのはせいぜい情念に伴う諸状況を枚挙し、情念を記述することくらいである(Hume [2000], p. 182, 214)。こうしてヒュームの情念分析は、単純印象としての情念が生起する因果的条件(causal conditions)を提示し、それらの間の類似性を指摘する、という仕方で行われている(Árdal [1989], p. 12)ので、ヒュームは、スミスが論点 1(理由説明の構想)で退けた因果的説明をまさに採用していることになる。ただし、ヒュームが行なっているのは、人間本性に関する因果的説明であって、行為の理由の因果的説明ではない¹³。したがって、実際のところはヒューム自身は論争の蚊屋の外に置かれていると考えた方がよいだろう。

このような次第であるため、論点 2(欲求論)における欲求の命題内容という問題に関しても、おそらくヒューム自身の理論の中に、対応するための道具立てをみつけることは難しい。しかし、命題内容云々とは別に、欲求が「感じられなくても持たれることが可能である」ということは、ヒュームの情念論の中で十分に応答可能である。これは、次の引用箇所と密接に関係しており、スミス自身がその箇所をヒュームがそう考えていたことの証拠として提示している。

スミスがヒュームのテキストに直接言及する最後の箇所は、欲求を傾向性として捉えるために参考にされている。それは、「穏やかな情念」に関するものであり、T2.3.4.8に見られる。

穏やかな欲求や傾向が存在しており、それらは情念に他ならないのだが、心に情動をほとんど生じさせず、直接の感じや感覚によってよりも、その結果によってよりよく知られる、というのは確かなことである。こうした欲求は、二種類ある。ひとつは、善意と敵意、生存愛、子供への

¹³さらに言えば、ヒューム哲学における「因果関係」は、観念と印象の連合原理に基づいて説明されるものであり、その点を踏まえた上でヒュームの名を挙げるのでなければ、「ヒューム主義」の看板は羊頭狗肉に終わると言わざるを得ない。

愛情など、われわれの本性に最初から埋め込まれた本能のようなものであり、もうひとつは、善への一般的欲求と悪への一般的嫌悪である(Hume [2000], p. 268)。

ここからスミスは、欲求を傾向性とみなすことで、欲求に関する反事実的条件文の認識論を導き出し、そこから一気に「動機づける理由」のヒューム主義を擁護する議論を展開し始める。しかし、やはり前後の文脈に即して考えれば、この引用箇所の要点は、「われわれが素朴に理性と情念の葛藤だと思っている事態は、実は情念と情念の葛藤なのだ」というヒュームの見解へと結びつくところにある。ヒュームによれば、われわれは、穏やかな情念が激しい情念を凌駕している状態を「心の強さ(strength of mind)」と呼ぶ。そして、この状態を引き寄せる決め手となるのは、最終的には穏やかな情念のもつ情念としての性質なのである。「心の強さ」とは、まさに「規範的な理由」のレベルに属する事柄である。ヒュームの見解とヒューム主義との相違に目をつぶって考えれば、皮肉にも、スミス自身の「動機づけのヒューム主義理論」の重要な論述ポイントに引用されたこの箇所は、スミス自身が退ける「規範的な理由のヒューム主義理論」へと切れ目なくつながっているように思われる。少なくとも、ヒュームの理論においては、動機づけの問題と規範性の問題との間には、ある種の必然的連関があると思われる。もちろん、スミスもまた、「動機づける理由」のヒューム主義と「規範的な理由」の反ヒューム主義との間には理論的な必然性があると考えているだろう。しかし、スミスの引用したこの箇所で垣間見えるヒュームの狙いは、ヒューム主義と反ヒューム主義を器用に結びつけようとするスミスの狙いを補強するよりむしろ、無効化してしまう可能性がある。これについては「規範的な理由」に関するヒューム主義とヒュームの見解との対照の中で論じることにするが、ここでは、スミスがこの箇所を(引用してまで)自らの議論の足がかりにしようとしたことは若干危ういのではないか、ということだけ押さえておけばよいだろう。

2.2 「規範的な理由」をめぐる反ヒューム主義との対照

すでに何度か述べたように、「規範的な理由」についてスミスは明確に反ヒューム主義をとっているので、ヒュームのテキストを引用してはいない。したがって、「動機づける理由」について行なったようなテキストの突き合わせはできないし、したとしてもあまり有益ではないだろう。というのも、議論が「規範的な理由」に至ると、ヒュームとヒューム主義の隔たりはかなり大きくなってしまっているように思われるからである。そこで、スミスの考えている「規範的な理由」のヒューム主義と反ヒューム主義に対して、ヒュームの見解に即してどのようなことが言えそうか、という観点から対照を試みることにしよう。

スミスは、「規範的な理由をもつこと」すなわち「評価すること」が「信念をもつこと」の問題なのか「欲求すること」の問題なのか、という形で、反ヒューム主義とヒューム主義の対立を捉えていた。ヒューム主義によれば、「評価すること」は「欲求すること」だと考えられる。これに対して、ヒュームの見解では、「評価すること」も「欲求すること」もともに情念の領域に属することである。ヒュームの考える情念の中には、何かを望むといった激しいものの他に、何かを是認したり長期的な善を求めたりといった穏やかなものも含まれている。こうしたヒュームの見地に立てば、スミスがヒューム主義の難問と位置づけた「評価すること」と「欲求すること」の食い違いは、たとえば、穏やかな情念と激しい情念の葛藤として容易に情念の理論の中で取り扱うことができるのである。

ちなみに、ここには、ルイスとフランクファートのタイプの「高階の欲求」に対してスミスが見いだしたレベル選択の恣意性の問題に類する困難はそれほど深刻な形では現れないと思われる。なぜなら、ヒュームの考える情念は、現代において「欲求」として語られているものよりも複雑な構造と豊かな内容をもっているからである。ここでその詳細を説明する紙幅のゆとりはないが、次のことを指摘しておけばとりあえず十分であろう。ヒュームは、情念の穏やか／激しい

(calm/violent)という区別と、強い／弱い(strong/weak)という区別とがまったく別のものである、と述べている(Hume [2000], p. 269)。現代における「欲求」の場合には、強い／弱いという分け方しかありえないように思われるが、ヒュームの考える情念の場合には、それとは別に穏やか／激しいという分け方が可能であり、それゆえ、「評価すること」と「欲求すること」とは同じ情念に属する別のものと考えることが可能なのである¹⁴。

さて他方、スミスの反ヒューム主義によれば、「評価すること」は「信念をもつこと」だと考えられる。スミスは、動機づける理由に関しては、傾向性としての欲求とそこに伴われる信念的要素という形で、信念に対する欲求の優位を認めたが、しかし、行為を動機づける欲求のいくつかは、合理的熟慮によって獲得された信念(評価することとしての信念、つまり、規範的な理由に関する信念)によって生み出される、と考えて、規範的な理由に関しては欲求に対する信念の優位を認めるのである(Smith [1994], p. 179)。これは、最終的には理性の優位を主張するものであり、さすがは反ヒューム主義と言うだけあって、ヒュームがまさに批判の対象としていた「理性主義」の立場を表明しているように思われる。

スミスの議論の面白いところは、「動機づける理由」についてはヒューム主義を採用しておきながら、「規範的な理由」については完全な反ヒューム主義をとっている点である。同時にヒューム主義と反ヒューム主義をとれるということは、前者のヒューム主義と後者のヒューム主義とでは主張内容が異なり、なおかつ、それらは相互に独立に成立しうるものでなくてはならない。前者のヒューム主義と後者のヒューム主義とで主張内容が異なるのは、すでに見た通りである。すると問題は、それらが相互に独立に成立しうるのか否か、である。動機づけにおいて欲求が本質的な役割を果たす、という第一のヒューム主義と、欲求は合理的批判

¹⁴また、編者ノートンにならって、「産出的(productive)情念」と「応答的(responsive)情念」という区別(Hume [2000], pp. 147-50)を用いて考えることも可能であろう。

を受け付けず、合理的な行為とは欲求が最大限に満たされる行為である、という第二のヒューム主義とはいったいどのような関係にあるのか。もちろんスミスは、これらを相互に独立したものと考えている。では、これをヒュームの見解に置き換えてみた場合はどうなるだろうか。

まず、第二のヒューム主義の「合理的な行為とは欲求が最大限に満たされる行為である」という主張は、ヒュームの見解の中にみいだすことはおそらくできない。なぜなら、ヒュームは、欲求を含む情念一般について理性との隔たりを認めており、欲求が最大限に満たされるということですから、それが理性に適っているのか反しているのかは人間本性の原理上問えないからである。すると、ヒュームの見解において第二のヒューム主義に相当するのは、情念が何らかの先行する印象のコピーでないという意味で真偽を問えないオリジナルなものである、という主張だとみなせるかもしれない。そう考えれば、ヒュームの場合には、動機づけにおいて情念が本質的な役割を果たす、という主張と、情念が真偽を問えないオリジナルなものである、という主張とが相互に独立に成立可能であるかどうかが問題となるだろう。これについて、ヒューム自身は明示的に論じてはいないが、おそらくどちらの主張もともに情念の不可欠な性質だと考えられている。情念の性質については稿を改めて詳細に論じる必要があるが、手短かに説明しておくと、ヒュームは、快苦の知覚を行為の動機づけの主要な原理として位置づけている(Hume [2000], p. 81)。ヒュームの印象と観念の体系の中では、快苦は印象に属する。同じく印象に属する情念は、印象の連合原理¹⁵により、それぞれ特有の快苦を伴うので、行為を動機づける性質をもつことになる。したがって、ヒュームの見解においては、動機づけにおいて情念が本質的な役割を果たすことと、情念が再現的性質をもたない印象であることとは、印象と観念の哲学としてのヒューム哲学の中で一貫した主張として語られている、と考えられる。

¹⁵観念の連合に対する印象の連合の異質性については、石川[2000]を参照せよ。

すると、スミスにおいて独立に成立可能であると考えられていた 2 つのヒューム主義は、ヒュームの見解に置き換えると、独自の理論的枠組みの中で一貫して語られている、ということになる。こうなると、いよいよヒューム主義とヒュームの間の溝は埋め難いものになってしまっているようにも思われてくる。実際、ヒューム主義とヒュームの見解は、「規範的な理由」についてはまったく別物だとみなさざるをえない。しかしながら、やや皮肉な話だが、スミスの「規範的な理由」をめぐる反ヒューム主義とヒュームの見解との間には、微妙な類似性をみいだすことができなくもないのである。以下、その類似性について、若干言及しておこう。

「規範的な理由」の反ヒューム主義を主張する際にスミスが最終的に頼るのは、人間の備える一定程度の合理性と、それゆえに働く心理的な整合性を求める圧力である。これがスミスの議論の中で唯一、信念と欲求をのり付けしている理論装置なのである。こうした心理的な整合性への圧力に訴えかける論法は、ヒュームにおける一般的観点による共感の補正¹⁶と類比的に考えることが可能であると思われる。特定の欲求を生み出すようにと働きかける「心理的な整合性を求める圧力」は、スミスにとっては合理性の原理であるかもしれないが、ヒュームにとっては人間本性の原理だということである。また、スミスは、行為を動機づける欲求のいくつかは合理的熟慮によって獲得された信念によって生み出される、と述べているが、実は、ヒュームもまた、ある種の信念¹⁷が情念に影響を及ぼすことを認めている(Hume [2000], pp.81-5)。この点についてはもう少し詳細な検討が必要であろうが、スミスの反ヒューム主義とヒュームの見解とが完全に対立するものではないということはわかるであろう。とはいえ、両者の間には依然として、理論の主軸を理性に置くか情念に置くかで大きな違いが存在している。ただ、仮に同

¹⁶ Korsgaard [1999], pp. 23-5 を参照せよ。また、奥田[2002]、72 頁にそのまとめがある。

¹⁷ただし、ヒュームにおける「信念」はやはり特殊な理論的背景に基づいているため、現代的な文脈に直接接続するのは危険である。

じような結論がことさらにひねった仕方でも得られるのなら、ヒュームの見解から得られるものに基づいて問題を再考してみる余地があるかもしれない。

3. 結び

以上見て来たように、現代メタ倫理学におけるヒューム主義とヒュームの見解は、実質的にはまったく別のものである。たとえば、ジョナサン・ダンシーは、ヒューム主義について次のように述べている。

動機づけ理論の古典的な立場は、それが創始者と目するデイヴィッド・ヒュームの見解にほとんど類似性をもっていないにもかかわらず、ヒューム主義(Humeanism)として知られている(Dancy [2000], p. 10)。

また、ダンシーによれば、デイヴィッド・ウィギンズは、「動機づけのヒューム主義理論」について、「ヒューム主義(Humeanism)」の代わりに「デイヴィッドソン主義(Davidsonianism)」と言うべきだ、と強く主張したらしい(Dancy [1993], pp. 14-5)。こうしたダンシーやウィギンズの指摘の通り、メタ倫理的ヒューム主義とヒュームの見解とは、出だしの想定からしてかなり大きく食い違っているように思われる。その想定とは、起点とされる「ヒュームの心理モデル」に他ならない。端的に言えば、そもそもヒュームが問題としているのは、理性と情念の関係であって、信念と欲求の関係ではない。これは、言葉の上だけの違いとして軽視できる類いのものではあるまい。というのも、ヒュームは、欲求を情念のひとつとして明確に位置づけているし、「ヒュームの心理モデル」における欲求とヒュームの哲学における情念とはあまりにも中身が違いすぎて、ラベルが「情念」から「欲求」に変わっただけだと考えることは到底できないからである。

あえて言うならば、ヒュームの哲学の基本となっているのは、理性と情念とい

う領域の区別よりむしろ、印象と観念からなる知覚の連合原理と共感原理である。この大きな枠組みの中では、信念は観念に含まれ、欲求は情念、印象に含まれる。そこでは、欲求を含む情念は非常に豊かな内実を与えられることになる。対比的に見ると、ヒュームの哲学における情念が、個々に具体的な内容をもったものとして論じられているのに対して、メタ倫理的ヒューム主義における欲求は、一定の形式を与えられた関数的項目へと還元され、その中身を喪失させられてしまっている。こうした形式化への傾斜は、メタ倫理学の領域的特徴であるのだろうが、そうしたアプローチで十分かどうかは問うてみる必要があるだろう。また、ヒューム研究の側は、現代メタ倫理学の論争の中で論じられているテクニカルな枝葉末節ではなく、むしろ論争で問題となっている要点をつかみ、それをヒュームの理論的枠組みの中でどのように論じることができるのかを検討してみなければならない。本稿は、そうした検討のための予備考察の試みであった。(了)

文献

石川徹 [2000]、「『人間本性論』における情念の分類と「情念論」の構造」、『香川大学教育学部研究報告』、第Ⅰ部、第109号。

奥田太郎 [2002]、「ヒューム道徳哲学における「一般的観点」」、『倫理学研究』、関西倫理学会、第32集、65-75頁。

田村圭一 [2004]、「道徳的な実在論と道徳的な動機づけ」、『思想』(岩波書店)、第961号、59-74頁。

Árdal, Pall S. [1989], *Passion and Value in Hume's Treatise*, 2nd ed., Edinburgh University Press.

Dancy, Jonathan [1993], *Moral Reasons*, Blackwell Publishers.

Dancy, Jonathan [2000], *Practical Reality*, Oxford University Press.

Hume, David [2000], *A Treatise of Human Nature*, ed. by D. F. Norton & M. J. Norton, Oxford

University Press.

Korsgaard, Christine M. [1999], 'The General Point of View: Love and Moral Approval in Hume's Ethics', in *Hume Studies*, vol. 25, no. 1-2, pp. 3-41.

McDowell, John [1998], *Mind, Value, and Reality*, Harvard University Press.

Miller, Alexander [2003], *An Introduction to Contemporary Metaethics*, Polity Press.

Smith, Michael [1994], *The Moral Problem*, Blackwell Publishers.

Smith, Michael [2004], *Ethics and the A Priori*, Cambridge University Press.

本稿は、2004 年度南山大学パツへ研究奨励金 I-A-2 の助成を受けて執筆されたものである。

(おくだ たろう 南山大学)